



『陽宅十書』 訳注I (平木康平教授退職記念号)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水野, 杏紀, 平木, 康平 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004462

『陽宅十書』 訳注 I

水野杏紀
平木康平

はじめに

『陽宅十書』は、居宅の吉凶を占断する書である。たとえば、居宅を囲む山河などの地勢や周囲の環境とその吉凶、居宅の門戸、樹木や池の配置とその吉凶などが記されている。全部で十篇、「論宅外形第一」、「論福元第二」、「論大遊年第三」、「論穿宮九星第四」、「論元空装卦訣第五」、「論開門修造門第六」、「論放水第七」、「論宅内形第八」、「論選擇第九」、「論符鎮第十」で構成されている。

『陽宅十書』の著者および成立年代については、確かなことはわかっていない。ただし、『明史』藝文志に、王君榮『陽宅十書』四巻が著録されているが、あるいはこれがそれにあたると考えられる。

隋から清にかけて、「宅」の名称をとめない、居宅に関する吉凶を記したと考えられる書には、以下のようなものがある。

『隋書』経籍志・五行類 『宅吉凶論』三巻、『相宅圖』八巻

『舊唐書』経籍志・五行類 『五姓宅經』二巻

『宋史』藝文志・五行類 『二宅賦』一巻、『宅心鑑式』一巻、

『相宅經』一巻、『宅體(髓)經』一巻、『陰陽二宅歌』一巻、

『二宅相占』一巻、『陰陽宅經』一巻、『陰陽宅經圖』一巻、王澄

『二宅心鑑』三巻、王澄『二宅歌』一巻、『陰陽二宅圖經』一巻、

『黄帝八宅經』一巻、『淮南王見機八宅經』一巻

『明史』藝文志・五行類 周繼『陽宅真訣』二巻、王君榮『陽

宅十書』四巻、陳夢和『陽宅集成』九巻、李邦祥『陽宅真傳』二巻、

周繼『陽宅新編』二巻、『陽宅大全』十巻

『清史稿』藝文志・術數類・相宅相墓之屬 魏青江撰『陽宅大成』

十五巻、吳鼎撰『陽宅撮要』二巻、梅漪老人撰『陽宅闢謬』一巻。

こうした書は、「堪輿」、「宅經」、「風水」、「相宅」など、さまざま
まな括りで分類され、一定した呼称はないが、王玉徳は『風水経典』

に分類している。「風水書」は、都城、都市の地勢の吉凶を論ずる書や葬地の吉凶を論ずる書もあるもので、それと区別するために、ここでは「居宅風水書」と称することにする。

「居宅風水書」は、宋代に多く上梓されたが、「宅経」の名称をとまなう書が目立つようになり、時代の変遷による名称の変化もうかがえる。

『陽宅十書』の先行研究としては、王玉徳編著『古代風水術注評』が挙げられる。この書は、『陽宅十書』の文を掲げながら、注評を加えている。⁴

今回、訳注として取りあげるのは、『陽宅十書』「論宅外形第一」の前半部である。明代の「居宅風水書」としては『营造宅経』⁵があるが、この書には『陽宅十書』と同様の文がいくつかみられる。そうしたものは脚注で二文を挙げ、その異同を対照できるようにした。

唐から五代の敦煌文化を示す「敦煌写本」には、宅の吉凶に関して記したものの（以下敦煌「宅経」と称す）がある。唐・宋代の「居宅風水書」の多くが散逸しているため、敦煌「宅経」は、当時の「居宅風水書」の一端を知ることができる貴重な資料となっている。⁶

『陽宅十書』には、たとえば「凡そ宅は左（東）に流水有る、こ

れを青龍と謂ふ。右（西）に長道有る、これを白虎と謂ふ。前（南）に汙池有る、これを朱雀と謂ふ。後（北）に丘陵有る、これを元武と謂ふ。最も貴き地たり。」（凡宅左有流水、謂之青龍。右有長道、謂之白虎。前有汙池、謂之朱雀。後有丘陵、謂之元武。為最貴地。）とあるが、同様の文は明代の『营造宅経』にもみられ、類似の文は敦煌「宅経」にもみられるが、⁷このような箇所は脚注に挙げ、対照できるようにした。原文は、『古今圖書集成』堪輿部（鼎文書局、民国六十六年）所収、『陽宅十書』を用いた。⁸

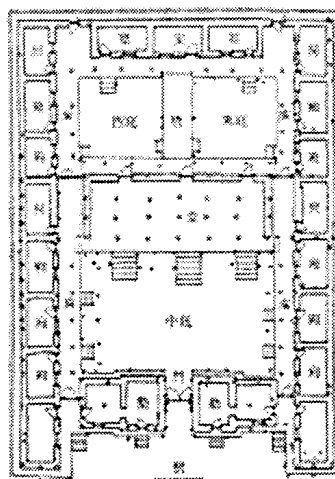
論宅外形第一

（原文）

人之居處、宜以大地山河為主。其來脈氣勢、最大關係人禍福、最為切要。若大形不善、總內形得法、終不全吉。故論宅外形。第一。

（訓読）

人の居處は、宜しく大地・山河を以て主と為すべし。其の來脈、氣勢は、最も大ひに人の禍福に關係し、最も切要たり。若し大形善からざれば、總じて内形は法を得るも、終に全吉ならず。故に宅の外形を論ず。第一。



圖四 鳳雛村の四合院建築址

図：四合院（鳳雛村の四合院形式建築址・西周代）門の左右に塾、東西脇に廂がある
 黄石林、朱乃誠著 高木智見訳（『中国考古の重要発見』日本エディタースクール出版部 二〇〇三）百四十六頁より転載

（原文）

水木金土四星龍。此作住基、終吉利。惟有火星甚不宜。只可剪裁作陰地。

倘有卓筆及牙旗、聳在外陽、方無忌。更須水口、收拾緊不宜。太迫成小器。

星辰近案、明堂寬案、近明堂、非窄勢。此言住基大局面。別有奇特分等第。

（訓読）

水木金土の四星^ハ龍あり。此に住基を作れば、終に吉利あり。惟^カだ火星有るは甚だ宜しからず。只だ剪裁もて陰地を作るべし。

倘^モし卓筆及び牙旗有りて、聳^{スギ}へて外陽に在らば、方^ハめて忌む無し。更に水口¹⁵を須^{モト}むるに、收拾すること緊^カきは宜しからず。太だ迫るは小器を成す。

（通釈）

星辰 案に近く、明堂 案に寛く、明堂に近きは、勢^セひを窄^セむるにあらず。此れ住基の大局面を言ふ。別に奇特有らば等第を分かつ。

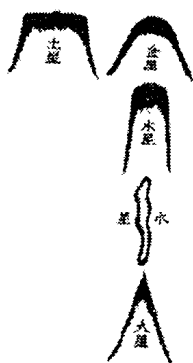
水木金土、四星の形をした山があり、そこに住宅の基礎をつくれば、最後までずっと吉利がある。ただ火星の山が近くにあるのは、はなはだよくない。その場合は植栽で陰地をつくるべきである。

もし、卓筆および牙旗の形の山があつて、住宅の南にそびえていれば、忌むことはない。さらに、水口が收拾してしまはれているのはよろしくない。居所が水口にはなはだ接近していると、小器となつてしまう。

星辰が案山に近い場合、また、明堂が案山から離れている場合、星辰が明堂に近い場合は、勢^セいをそぐわけではない。

以上のことは、

住宅の基礎の大原則を述べているのである。特別な問題がある場合は、節を分けて説明する。



圖說

此五星正體也形神冲泰體格均皆得精氣之至粹者也五星者金木水火土也

図：五星正體圖

五星（木火土金水）の体を記す『元女青囊海角經』（『古今圖書集成』堪輿部）による

(原文)

凡宅左有流水、謂之青龍。右有長道、謂之白虎。前有汗池、謂之朱雀。後有丘陵、謂之玄武。為最貴地。¹⁶

凡宅東下西高、富貴英豪。前高後下、絶無門戸。後高前下、多足牛馬。¹⁷

(訓読)

凡そ宅は左に流水有る、これを青龍と謂ふ。右に長道有る、これを白虎と謂ふ。前に汗池有る、これを朱雀と謂ふ。後に丘陵有る、これを玄武と謂ふ。最も貴き地たり。

凡そ宅は東下く西高きは、富貴英豪たり。¹⁸ 前高く後下ければ、絶へて門戸無し。後高く前下きは、多く牛馬を足らす。¹⁹

(通釈)

およそ居宅は、東に流水がある場合、これを青龍という。西に長道がある場合、これを白虎という。南に池がある場合、これを朱雀という。北に丘陵がある場合、これを玄武という。これらが備わっているのは、居宅とするのに最も貴い地形である。

およそ宅地は東が低く西が高いと、(その宅は)富貴となり、英雄豪傑を輩出する。南が高く北が低いと、家の血筋が絶える。北が

高く南が低いと、多くの牛馬を持つほど豊かになる。

(原文)

凡宅不居當衝口處。不居寺廟。不近祠社、窑冶、官衙。不居草木不生處。不居故軍營、戰地。不居正當水流處。

不居山脊衝處。不居大城門口處。不居對獄門處。不居百川口處。²⁰

(訓読)

凡そ宅は衝口に當たる處には居らず。寺廟には居らず。祠社、窑冶、官衙には近づかず。

草木生ぜざる處には居らず。故き軍營、戰地には居らず。正に水流に當たる處には居らず。

山脊衝たる處には居らず。大城の門口の處には居らず。獄門に對する處には居らず。百川の口處には居らず。

(通釈)

およそ宅地が街道にぶつかるところ(T字路、Y字路)には住まない。古い寺や廟、祠、社、窯場、官庁のそばには住まない。昔の陣營や戰場だったところには住まない。ちょうど水の流れにぶつかるところには住まない。

山の背におつかるところには住まない。大きな城門の入口の近くには住まない。獄舎の門に向かいあっているところには住まない。多くの河川が集った河口には住まない。

(原文)

凡宅東有流水、達江海吉。東有大路貧。北有大路凶。南有大路富貴。凡宅樹木皆欲向宅吉。背宅凶。

凡宅地形卯酉不足、居之自如。子午不足、居之大凶。子丑不足、居之口舌。南北長東西狭吉。東西長南北狭、初凶後吉。²¹

(訓読)

凡そ宅は東に流水有りて、江海に達するは吉なり。東に大路有るは貧なり。北に大路有るは凶なり。南に大路有るは富貴なり。

凡そ宅は樹木の皆 宅に向はんと欲するは吉なり。宅に背くは凶なり。

凡そ宅の地形は卯酉足らざる、これに居らば自如たり。子午足らざる、これに居らば大凶なり。子丑足らざる、これに居らば口舌あり。南北長く東西狭ければ吉なり。東西長く南北狭ければ、初めは凶にして後には吉なり。

(通釈)

およそ東に流水があり、河や海に通じていれば(その宅は)吉である。東に大通りがあれば(その宅は)貧窮する。北に大通りがあれば(その宅は)凶である。南に大通りがあれば(その宅は)富貴となる。

およそ樹木はみな、居宅のほうに向かつてのびているのは吉であり、居宅に背を向けてのびているのは凶である。

およそ居宅の地形は卯酉(東・西)の方角がかけていると、ここに住めば安らかに暮らすことができる。子午(北・南)の方角がかけていると、ここに住めば大凶である。子丑(北・北東)の方角がかけていると、ここに住めばいさかいが生じる。宅地が南北に長く東西に狭ければ吉であり、東西に長く南北が狭ければ、最初は凶であるが後には吉となる。

(原文)

凡宅居滋潤光澤、陽氣者吉。乾燥無潤澤者凶。

凡宅前低後高、世出英豪。前高後低、長幼昏迷。左下右昂、長子榮昌。陽宅則吉、陰宅不彊。右下左高、陰宅豐豪、陽宅非吉。主必奔逃。

兩新夾故、死須不住。兩故夾新、光顯宗親。新故俱半、陳粟朽貫。²²

(訓読)

凡そ宅居は滋潤にして光澤あり、陽氣ある者は吉なり。乾燥して潤澤無き者は凶なり。

凡そ宅は前低く後高きは、世々英豪を出だす。前高く後低きは、長幼昏迷す。左下く右昂きは、長子榮昌す。陽宅は則ち吉なるも、陰宅は彊からず。右下く左高きは、陰宅は豊豪なるも、陽宅は吉にあらず。主は必ず奔逃す。

兩つの新しき故きを夾まば、死して須す住らず。兩つの故き新しきを夾まば、宗親を光顯す。新しきと故きと俱に半ばすれば、粟を陳くし貫を朽す。

(通釈)

およそ居宅はしつとり潤いがあり、よく光がさして、陽氣にみちているのは吉である。乾燥して潤いがないのは凶である。

およそ前(南)が低く、後(北)が高ければ、世々英雄、豪傑を輩出する。前(南)が低く、後(北)が高ければ、老いも若きも道に暗く迷う。左(東)が低く、右(西)が高ければ、長子が繁榮する。陽宅の場合は吉であるが、陰宅にはむいていない。右(西)が高く、左(東)が高ければ、陰宅の場合は豊かで力強いが、陽宅には吉ではない。その家の主人は必ず出奔する。

両側の新しい建物が古い建物をはさんでいると、死をもたらし、必ず永住することはできない。両側の古い建物が新しい建物をはさんでいると、一族は大いに繁榮する。新しい建物と古い建物が相半ばしてると、古い穀物が山積して、錢さしが腐るほどに、財が蓄積される。

(原文)

凡宅或水路、橋梁、四面交衝者、使子孫怯弱、主不吉利。

凡宅門前不許開新塘。主絶無子、謂之血盆。照鏡門稍遠、可開半月塘。

凡宅門前不許人家屋箭來射。主出子孫忤逆不孝。

凡宅門前不許見二三四尺紅白赤石。主凶。

(訓読)

凡そ宅は水路、橋梁、四面に交衝するもの或らば、子孫をして怯弱ならしめ、主をして吉利ならざらしむ。

凡そ宅は門前に新塘を開くを許さず。主絶へて子無し、之を血盆と謂ふ。門を照鏡すること稍遠ければ、半月塘を開くべし。

凡そ宅は門前に人家の屋箭の來射するを許さず。主は子孫の忤逆して孝ならざるを出だす。

凡そ宅は門前に二、三、四尺の紅白の赤石を見るを許さず。主凶たり。

(通釈)

およそ宅地は水路や橋が四方に交差していると、子孫を虚弱にさせ、その家の主人を不吉にさせる。

およそ居宅の門前にあらたな池を開鑿してはならない。その家の主人が絶えて後嗣がいなくなる。これを血盆というのである。門を照らし出す距離がやや遠い場合は、半月の塘を開鑿してもよい。

およそ居宅の門前に、他人の居宅の屋根のところがっている部分が自分の居宅を射抜く形をしているのを許してはならない。(もしそうならば)その家の主人は、子孫が親にさからう不孝者をだす。

およそ居宅は門前に二尺か三尺、四尺ほどの紅白の入り混じった赤石がみえるのを許してはならない。(もしそうならば)その家の主人は凶となる。

(原文)

凡宅屋後見拍脚山、出淫婦、通僧道。

凡宅門前有探頭山、四時防盜。若在屋(後)出軍賊之人。

凡宅屋後或有峻嶺道路、或前衝後射、主出軍賊之人。

凡宅屋後不要絶尖・尾地、主絶人丁。門前屋後方圓大吉。凡宅門前不要朝垂。飛水、返背者是也。主出淫亂之婦。

(訓読)

凡そ宅は屋後に拍脚山を見るは、淫婦を出だし、僧道に通ず。

凡そ宅は門前に探頭山有るは、四時盜を防ぐ。若し屋(後)に在るは、軍賊の人を出だす。

凡そ宅は屋後に或ひは峻嶺道路有る、或ひは前衝後射するは、主は軍賊の人を出だす。

凡そ宅は屋後に絶尖、尾地を要せず。主は人丁を絶つ。門前屋後、方圓なるは大吉なり。

凡そ宅は門前に朝垂を要せず。飛水、返背するは是なり。主は淫亂の婦を出だす。

(通釈)

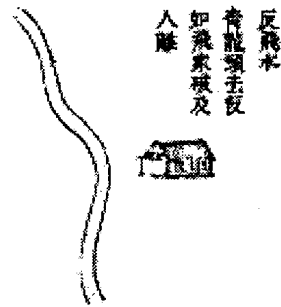
およそ居宅の後に拍脚山²⁴がみえると、淫亂の嫁を出し、出家人を出す。

およそ居宅の門前に探頭山²⁵があると、一年を通じて盜賊を防ぐことができる。もしそれが居宅の背後にあれば、軍賊の人を出す。

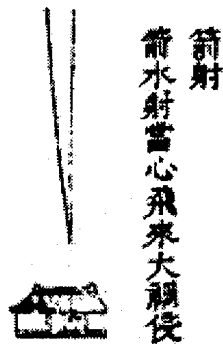
およそ居宅の背後に高く険しい峰や道路がある場合、あるいは前

からぶつかり、背後から射るような形をしている場合は、その家の主人は軍賊の人を出す。

およそ居宅の背後に尖ったり、尾のようになった土地があつてはいけない。(もしそのような土地があれば) その家の主人は人足を失う。門前や居宅の背後(の地形)が方形、円形であれば大吉である。およそ居宅の門前で宅に向かつて垂れている水があつてはならない。飛水、返背する水がこれである。家の主人は淫乱の妻を出す。



図：反飛水の例
『水龍經』(『古今圖書集成』
堪輿部) による



図：箭射の例
『水龍經』(『古今圖書集成』
堪輿部) による

(原文)

凡宅門前見水聲悲吟、主退財。

凡宅門前忌有雙池。謂之哭字。西頭有池為白虎開口。皆忌之。

凡宅門前、屋後見流淚水、主眼疾。

凡宅門前朝平圓山、主吉。

凡宅門前、屋後溝渠、水不可分八字。及前後水出、主絶嗣敗財。

凡宅井不可當大門、主官訟。

(訓読)

凡そ宅は門前に水聲の悲吟するを見れば、主は財を退く。

凡そ宅は門前に雙池有るを忌む。之を哭字と謂ふ。西頭に池有る

は白虎の口を開くと為す。皆之を忌む。

凡そ宅は門前、屋後に流淚の水を見れば、主は眼疾あり。

凡そ宅は門前に朝平の圓山あれば、主は吉なり。

凡そ宅は門前、屋後に溝渠あれば、水は八字に分かつべからず。

前後に水出づるに及べば、主は嗣を絶ち、財を敗らん。

凡そ宅は井 大門に當たるべからず。主は官訟あり。

(通釈)

およそ居宅は門前に悲しくむせびなくような水の音があれば、その家の主人は財をなくす。

およそ居宅は門前に二つ並んだ池があるのを忌む。これを(口が二つ並んだ)哭字という。西に池があるのは白虎が口を開いている

形として、皆これを忌む。

およそ居宅は門前、背後に涙が流れるような水があれば、その家の主人は眼病を患う。

およそ居宅は門前になだらかな丸い朝山があれば、その家の主人は吉である。

およそ居宅は門前や背後に溝があれば、水は八の字に分けてはいけない。門前や屋後に水が出ていると、その家の主人は世継ぎをなくし、財を失う。

およそ居宅は井戸が大門の前にあってはいけない。(そうであれば)その家の主人は裁判沙汰にまきこまれる。

(原文)

凡造屋、切忌先築牆圍並外門。主難成。²⁶

凡大門門扇及兩畔牆壁、須要大小一般。左大主換妻。右大主孤寡。²⁷

大門拾柱、小門六柱、皆要著地則吉。門扇高於牆壁、多主哭泣。²⁸

門口水坑家破。伶仃大樹當門、主招天瘟。²⁹

(訓読)

凡そ屋を造るに、切に先づ牆圍並びに外門を築くを忌む。主成り難し。

凡そ大門の門扇及び兩畔の牆壁は、須く大小一般なるを要むべし。左大なれば主 妻を換ふ。右大なれば主 孤寡なり。

大門拾柱、小門六柱、皆要^{かなら}ず地に著くれば則ち吉なり。

門扇 牆壁より高ければ、主 哭泣すること多し。

門口に水坑あれば家破る。伶仃たる大樹 門に當たれば、主天瘟を招く。

(通釈)

およそ家屋を造営する場合は、最初に垣根ならびに外門を築くことを切に忌む。(忌まなければ)その家の主人は大成しない。

およそ大門の門扉及び(左右)両方の外扉は必ず大小同じにすべきである。左が大きければその家の主人は妻を換える。右が大きければ、妻に先立たれる。大門は十本の柱、小門は六本の柱が、みなかならず地面についていれば吉である。

門扉が外扉より高ければ、その家の主人は泣き悲しむことが多い。門口に水穴があれば、家が破産する。聳え立つ大樹が門の正面にあれば、その家の主人はやはり病にかかる。

(原文)

牆頭衝門、常被人論。交路夾門、人口不存。衆路相衝、家無老翁。

門被水射、家散人啞。神社對門、常病時瘟。門下水出、財物不聚。門著井水、家招邪鬼。³⁰ 糞屋對門、癰癩常存。³¹ 水路衝門、忤逆子孫。

32

(訓読)

牆頭 門に衝たれば、常に人に論ぜらる。交路 門を夾めば、人口存せず。衆路 相衝たれば、家に老翁無し。

門 水射を被れば、家散じて人啞たり。神社 門に對すれば、常に時瘟を病む。門下に水出づれば、財物聚まらず。

門 井水に著かば、家 邪鬼を招く。糞屋 門に對すれば、癰癩常に存す。水路 門に衝たれば、子孫を忤逆せしむ。

(通釈)

外塀の先端が門にぶつかれば、常に人の批判を受ける。交差した道路が門をはさんでいれば、その家は長続きしない。多くの道路が家にぶつかっていれば、(長生きができません) 家に老人がいない。

門に矢のように水が向かってくるならば、その家は破産し、家人は啞になる。神祠が門に向かいあっていれば、常にはやり病いをわづらう。門の下に水が出れば、財物がたまらない。

門が井戸の水についていれば、その家は邪気を招く。厠が門に向かい合っていれば、関節の病いが常におこる。水路が門にぶつか

ていれば、子孫を逆らわせるようになる。

(原文)

倉口向門、家退遭瘟。搗石門居、宅出隸書。門前直屋、家無餘穀。³³

門前垂楊、非是吉祥。³⁴

巽方開門、及隙穴開窗之類、並有災害。³⁵ 東北開門、多招怪異。重

重宅戸、三門莫相對、必主門戸退。³⁶

(訓読)

倉口 門に向へば、家退へ瘟に遭ふ。搗石の門居は、宅に隸書をだす。門前 屋に直れば、家に餘穀無し。門前の垂楊は、是れ吉祥に非ず。

巽方に門を開く、及び隙穴ある、窓を開くの類は、並びに災害有り。東北に門を開かば、多く怪異を招く。重重たる宅戸は、三門相對すること莫かれ。必ず主の門戸退ふ。

(通釈)

倉の入口が門に向かい合っていれば、その家は衰退して家人はやり病いにあう。搗石の門の宅は、家から隸役をだす。門の前に(他の建物の) 屋根があたっていれば、その家に余剰の穀物が無い。

門前に垂楊があれば、吉祥ではない。

巽方（東南方）に門を開いていたり、隙間があつたり、窓を開いていけば、いずれも災いがある。東北に門を開けば、多く怪異を招く。いくえにも（棟の）重なった居室は、その三門を向かい合わせではいけない。（向かい合つていけば、）必ずその家の主人の一門が衰退する。

（原文）

八方坑坎歌

丑低投軍號陣中	艮低師巫殘患人
寅低狼傷并虎咬	他郷外死甲上坑
卯地有變傷眼目	乙辰有水患禿風
巽地坑池官司敗	陽短陰山出暗風
午丙有坑火災顯	未丁坑下癆漱人
酉方坑下家貧窘	戌亥蛇腰鬼賊侵
壬子有彎絶後嗣	禍福如同在掌中

（訓読）

八方坑坎歌

丑低ければ投軍 陣中に號ぶ 艮低ければ師巫 患人を殘ぶ

寅低ければ狼傷り并びに虎咬む	他郷に外死す 甲上の坑
卯地 變有れば眼目を傷る	乙辰 水有れば禿風を患ふ
巽地 池を坑てば官司敗る	陽短かければ陰山暗風を出だす
午丙 坑有れば火災顯はる	未丁 坑下なれば人を癆漱す
酉方 坑下なれば家貧窘す	戌亥 蛇腰なれば鬼賊侵す
壬子 彎有れば後嗣を絶つ	禍福同じく掌中に在るが如し

（通釈）

八方坑坎歌

（宅の）丑の方が低ければ、投降した軍が陣中で泣き叫ぶ
 艮の方が低ければ、呪医が患者を傷つける
 寅の方が低ければ、狼が襲い虎が咬む
 他郷で客死するは、甲の方の穴のなか
 卯の方の地に漏水があれば、眼病を患う
 乙辰の方に水があれば、脱毛の病いを患う
 巽の方の地に池の穴をうがつならば、役人は腐敗する
 陽氣が短かければ、陰山が暗風を吹きだす
 午丙の方に穴があれば、火災がおこる
 未丁の方に穴があつて低ければ、人を喘息の病いにさせる
 酉の方に穴があつて低ければ、家が貧窮する

戌亥の方に蛇の腰のように曲がった穴があれば、鬼や賊が侵入する
壬子の方に湾曲があれば、後嗣を絶やす

この世の禍福はいずれも掌中にあるように、歴然とわかる

(原文)

何知經

何知、人家貧了貧。山走山斜、水返身。
何知、人家富了富。員峰磊落、皆朝護。
何知、人家貴了貴。文筆秀峰當案起。
何知、人家出富豪。一山高、了一山高。
何知、人家破敗時。一山低、了一山低。



図：文筆（『地理人子須知』による）

(訓読)

何知經

何ぞ知らん、人家 貧しければ了に貧しきを。山走り山斜めにし
て、水 身を返せばなり。
何ぞ知らん、人家 富めば了に富むを。員峰 磊落して、皆朝護
すればなり。
何ぞ知らん、人家 貴ければ了に貴きを。文筆の秀峰 案に當た
りて起てばなり。

何ぞ知らん、人家 富豪を出だすを。一山高く、了た一山高けれ
ばなり。

何ぞ知らん、人家 破敗の時を。一山低く、了た一山低ければな
り。

(通釈)

どうしてわかるのか、貧しい家はずっと貧しいかを。(宅の周囲
に) 山が連なり山が傾斜して、水が(家の前で) 身をひるがえして
いるからである。

どうしてわかるのか、富んでいる家はずっと富んでいるかを。い
くつもの岩山がきりたって、(それらが) 皆、朝山の位置に家を護
るようにそびえているからである。

どうしてわかるのか、高貴な家はずっと高貴であるかを。文筆の
ような峰が案山の位置に立っているからである。

どうしてわかるのか、その家が富豪を出すかを。一つの山が高く
そびえ、またもう一つの山も高くそびえているからである。

どうしてわかるのか、その家が破滅するときがあるかを。一つの
山が低く、またもう一つの山も低いからである。

(原文)

何知、人家出孤寡。琵琶側扇、孤峰邪。
 何知、人家少年亡。前也塘兮、後也塘。
 何知、人家弔頸死。龍虎頸上有條路。
 何知、人家少子孫。前後兩邊高、過墳。
 何知、人家二姓居。一邊山有、一邊無。

(訓読)

何ぞ知らん、人家 孤寡を出だすを。琵琶 側扇し、孤峰^{よこしま} 邪なればなり。
 何ぞ知らん、人家 少年亡^しするを。前にまた塘あり、後にまた塘あればなり。

何ぞ知らん、人家 頸死を弔うを。龍虎の頸上に條路有ればなり。
 何ぞ知らん、人家 子孫少なきを。前後兩邊高く、墳を過ぐればなり。

何ぞ知らん、人家 二姓居るを。一邊に山有りて、一邊に無ければなり。

(通釈)

どうしてわかるのか、その家が孤児や寡婦をだすかを。琵琶を横

だおししたような、いびつな独立峰があるからである。

どうしてわかるのか、その家ではいつも若者が死ぬかを。前にも池があり、後ろにも池があるからである。

どうしてわかるのか、その家では頸死の者を弔うことになるかを。青龍(東)と白虎(西)の頸にあたるところにひとすじの道路があるからである。

どうしてわかるのか、その家は子孫が少ないかを。家の前後左右が高く、墳墓を越えているからである。

どうしてわかるのか、その家では姓を異にする二家族が同居するかを。(左右両辺のうち)一方には山があり、もう一方には山がないからである。

(原文)

何知、人家主離郷。一山主竄、過明堂。
 何知、人家出倣軍。鎗山坐、在面前伸。
 何知、人家被賊偷。一山走出、一山鉤。
 何知、人家忤逆有。龍虎山鬪、或開口。
 何知、人家被火烧。四邊山脚、似芭蕉。

(訓読)

何ぞ知らん、人家の主 郷を離るるを。一山の主竄 明堂を過ぐればなり。

何ぞ知らん、人家 倣軍を出だすを。鎗山 坐して、面前に在りて伸ぶればなり。

何ぞ知らん、人家 賊偷を被むるを。一山 走出し、一山 鉤ればなり。

何ぞ知らん、人家 忤逆有るを。龍虎の山 闘ひて、口を開くこと或ればなり。

何ぞ知らん、人家 火焼を被るを。四邊の山脚、芭蕉に似たればなり。

(通釈)

どうしてわかるのか、その家の主人が故郷を離れるかを。主山から流れてくる水が明堂を横切っているからである。

どうしてわかるのか、その家は軍人を出すかを。鎗の形をした山が家の前面に坐して、すっと伸びているからである。

どうしてわかるのか、その家では盗賊の被害を受けるかを。ひとつの山は(まっすぐ)走り、もうひとつの山はかぎの手に曲がっているからである。

どうしてわかるのか、その家では反逆者を出すかを。青龍(東)の山と白虎(西)の山が(互いに)闘い、口を開けているからである。

どうしてわかるのか、その家では火災をこうむるかを。家の四方にある山のすそが、芭蕉が葉を広げているのに似ているからである。

(原文)

何知、人家女淫乱。門對抗、竄水有返。

何知、人家常發哭。面前有個鬼神屋。

何知、人家不旺財。只少源頭活水來。

何知、人家不久年。有一邊兮、無一邊。

何知、人家受孤恓。水走明堂似簸箕。

(訓読)

何ぞ知らん、人家の女淫乱なるを。門 坑に對し、竄水の返す有ればなり。

何ぞ知らん、人家常に哭を發するを。面前に個の鬼神の屋有ればなり。

何ぞ知らん、人家 財を旺んにせざるを。只だ源頭の活水來たること少なければなり。

何ぞ知らん、人家 久年ならざるを。一邊有りて、一邊無ければなり。

何ぞ知らん、人家孤恚こいを受くるを。水 明堂を走ること箕を鍔かるに似たればなり。

(通釈)

どうしてわかるのか、その家では娘が淫乱になるかを。門が穴に面して、わずかに漏れでる水が身を反すように流れているからである。

どうしてわかるのか、その家ではいつも哭泣するような(悲しい)ことがおこるかを。目の前に鬼神の祠があるからである。

どうしてわかるのか。その家は財がたまらないかを。水源からいきおいのよい水が流れてくることが少ないからである。

どうしてわかるのか、その家は長続きしないかを。片側には山があつて、片側にはないからである。

どうしてわかるのか、その家は身寄りをなくす悲しみを受けるかを。水の流れが明堂を箕をあおるように(水しぶきをあげて)走りぬけているからである。

(原文)

何知、人家修善果。面前有個香爐山。
何知、人家會做師。排符山頭有香爐。
何知、人家出跏跛。前後金星齊帶火。
何知、人家致死來。停屍山在面前排。
何知、人家有殘疾。只因水帶黃泉入。
何知、人家宅少人。後頭來龍無氣脈。
仔細相山并相水、斷山、禍福靈如見。
千形萬象在其中、不過此經而已矣。

(訓読)

何ぞ知らん、人家 善果を修むるを。面前に個の香爐山有ればなり。
何ぞ知らん、人家 做師さくしに會するを。排符山の頭に香爐有ればなり。

何ぞ知らん、人家 跏跛を出だすを。前後の金星齊ひとしく火を帯ぶればなり。

何ぞ知らん、人家 死を致し來たるを。停屍山 面前に在りて排すればなり。

何ぞ知らん、人家 殘疾有るを。只だ水帶 黃泉に入るに因れば

なり。

何ぞ知らん、人家 宅に人少なきを。後頭の來龍 氣脈無ければなり。

仔細に山を相し並びに水を相して、山を断ずれば、禍福靈しく見
るが如し。千形萬象 其の中に在るは、此經に過ぎざるのみ。

(通釈)

どうしてわかるのか、その家は善果をおさめることができるかを。
家の目の前に香爐山³⁷があるからである。

どうしてわかるのか、その家はいくさに遭遇するかを。排符山³⁸
に香爐の形の頂きがあるからである。

どうしてわかるのか、その家は足の不自由な人を出すかを。前後
の金星山がともに周囲に火星山を帯びているからである。

どうしてわかるのか、その家は死を招き続けるかを。停屍山³⁹が
家の目の前にあるからである。

どうしてわかるのか、その家はけがや病気が多いかを。ただ水帯
が黄泉まで流れおちているからである。

どうしてわかるのか、その家は家族が少ないかを。後から来る龍
脈に生気がないからである。

仔細に山を相し、水を相して、山(水)を占断すれば、人家の禍

福は不思議なぐらい目に見えるがごとく示される。あらゆる形勢と
現象がそのなかに含まれるものとしては、この(何知)經にまさる
ものはないのである。

(原文)

宅忌架橋梁歌

一橋高架宅廳前

左右相同後亦然

不出三年并五載

家私蕩盡賣田園

此法屢驗。故特標為一訣

(訓読)

宅は橋梁を架くるを忌むの歌

一橋高く宅廳の前に架かる

左右相同しく後も亦た然り

三年並びに五載を出でずして

家私 蕩盡して田園を賣らん

此法屢驗あり。故に特に標して一訣を為す

(通釈)

居宅の周囲に橋をかけるのを忌む歌

ひとつの橋を高々と 居宅の前にかけるなら

左も右も同じこと

後ろもまた同じこと

三年五年たたぬうち 家の財産すりへらし

田畑も売ってしまうだろう

この法則はしばしば顕現する。ゆえに特にかかげてひとつの要訣とするのである。

おわりに

『陽宅十書』を通読すると、人々が山河の形勢、水や風の流れに注目し、自然界のさまざまな物象や形象の中に気を感じ、その良し悪しによって、居住環境の吉凶を判断していたことがわかる。

このなかには、確かに現代のわれわれの思考方法では、合理的に説明ができない内容もある。しかし、それらのなかには経験則から得られた知見も包含されていると考える。訳注を施すに際しては、できるだけ当時の人々の思考方法に沿って、その考え方を理解するように努めた。

今後この書の訳注を進める。また「居宅風水書」や敦煌「宅経」などと比較しながら、さらに考察を加えていきたい。

注

- 1 『新唐書』藝文志・五行類は『五姓宅経』二十卷とする。
 - 2 「居宅風水書」と考えられる書には堪輿の名もみられる。
『宋史』藝文志・五行類 『堪輿經』一卷、『太史堪輿』一卷、
『黄帝四序堪輿經』一卷
 - 『明史』藝文志・五行類 謝延柱『堪輿管見』二卷、薰章
『堪輿秘旨』六卷、陳時暘『堪輿真諦』三卷
 - 『清史稿』藝文志 術數類 相宅・相墓之屬 熊起礪撰『堪輿
洩秘』六卷
 - 3 王玉徳編著『古代風水術注評』（北京師範大学出版社、広西師
範大学出版社 一九九二）
 - 4 王玉徳編著『古代風水術注評』（北京師範大学出版社、広西師
範大学出版社 一九九二）百六十二―百七十八頁
 - 5 『营造宅経』（『周書秘奥营造宅経』）は『居家必用事類全集』所
収。『居家必用事類全集』は『北京圖書館古籍珍本叢刊』六十
一（北京圖書館古籍出版編輯組 書目文献出版社 一九八八）
にある。
- 『居家必用事類全集』は日本に伝来、京都の松栢堂より寛文十三年（一六七三）七月に和刻本がだされた。『居家必用事類』叙には「嘉靖三十九年（一五六〇）夏五月錢唐（現在の浙江省

- 杭州市)の田汝成撰す」とある。田汝成はこの書には宋、元代の風俗が多く、元人によってしるされたものと推定している。
- 6 敦煌写本「宅経」の研究については、菅原信海「占筮書」(『講座敦煌』五 敦煌漢文文献 大東出版社 一九九二)、宮崎順子「敦煌文書宅経初探」(『東方宗教』第八十五号 一九九五)、黄正建『敦煌占卜文書与唐五代占卜研究』(学苑出版社 二〇〇一)の他、陳于柱『敦煌写本宅経校録研究』(民俗出版社 二〇〇七)、金身佳編著『敦煌写本宅経葬書校注』(民族出版社 二〇〇七)などの研究がある。
- 7 敦煌「宅経」の文については、陳于柱『敦煌写本宅経校録研究』(民俗出版社 二〇〇七)、金身佳編著『敦煌写本宅経葬書校注』(民族出版社 二〇〇七)を参照した。
- 8 用語の説明については、以下の書を参考とした。
村山智順『朝鮮の風水』(国書刊行会 一九七二) 復刻版
王玉德編著『古代風水術注評』(北京師範大学出版社、広西師範大学出版社 一九九二)
王玉德『尋龍点穴』(中国電影出版社 二〇〇六)
三浦國雄『風水講義』(文春新書 文藝春秋社 二〇〇六)
9 來脈 山河の起伏が龍の姿のようであることから、これを称して龍脈という。來脈とは龍が穴(山の氣脈の結するところ)に
- 10 來たる山の起伏のことをいう。
陽宅 生きている人の住む居宅などを陽宅という。一方、死んだ人の住む居所、つまり、葬地(墓地)を陰宅とする。
- 11 來龍 龍脈の来源を名づけたものをいう。
- 12 明堂 もとは「王者の大廟、政教を行う堂」の意味である。穴前(建物の前方)の地をさし、青龍、白虎に抱かれたところをいう。
- 13 廂と塾 陝西省の周原では西周時代の大型建築群が一九七〇年頃に発掘されたが、それは四合院形式の建築物であった。この再現図面のなかには、廂と塾と称されるものがあり、主人の居所は「北に坐し、南面する」構造となっている。また、現在の北京に残る典型的な四合院も同様の配置である。
- 14 五星 木、火、土、金、水の五星の山とは、山の形状によって、五つに分類したものである。木星の山の頭は圓で身は直、火星の山の頭は尖で裾は広、土星の山の頭は平、金星の山の頭は圓で裾は広、水星の山の身は曲、である。
- 15 水口 青龍と白虎の流れが合流し、流れ去るところをいう。
- 16 『陽宅十書』
凡宅左有流水、謂之青龍。右有長道、謂之白虎。前有汙池、謂之朱雀。後有丘陵、謂之元武。為最貴地。

『營造宅経』

屋宅舎、欲左有流水、之謂青龍。右有長道、謂之白虎。前有汗池、謂之朱雀。後有丘陵、謂之玄武。為最貴地。

敦煌「宅経」(P2615a) 【□□五姓陰陽等宅凶経】一卷)

皇帝問地曹、何為青龍白虎朱雀玄武。地曹答曰、左有南流水為青龍、右有南行大道為白虎、前有汗池為朱雀、後有丘陵為玄武。

17 『陽宅十書』 凡宅東下西高、富貴英豪。前高後下、絶無門戸。

後高前下、多足牛馬。

『營造宅経』 凡宅東下西高、富貴雄豪。前高後下、絶無門戸。

後高前下、多足牛馬。

18 東下西高富貴英豪。

東が低く西が高ければ、朝の太陽の光が燦燦とふりそそぎ、夏場の強烈な西日をさえぎり、冬の北西からの強風を遮る役割を果たす。この反対であれば、夏場の西日が強く、冬の北西風を受ける地となることになる。

19 後高前下多足牛馬。

北が高く、南が低い地は南の太陽の光を得られる地であり、冬場の北風を防いでくれる。その反対であれば、南の太陽の光が少なく、冬の北風の影響を受ける地である。『陽宅十書』に記

されていることは、建築学、自然科学からみても理にかなっている。

20 『陽宅十書』

凡宅不居當衝口處。不居寺廟。不近祠社、窑冶、官衙。

不居草木不生處。不居故軍營、戰地。不居正當水流處。

不居山脊衝處。不居大城門口處。不居對獄門處。不居百川口處。

『營造宅経』

凡宅不居當衝口處。不居古寺廟及祠社、鑪冶處。

不居草木不生處。不居故軍營、戰地。不居正當水流處。

不居山脊衝處。不居大城門口處。不居對獄門處。不居百川口處

(不居)。

21 『陽宅十書』

凡宅東有流水、達江海吉。東有大路貧。北有大路凶。南有大路

富貴。

凡宅樹木皆欲向宅吉。背宅凶。

凡宅地形卯酉不足、居之自如。子午不足、居之大凶。子丑不足、

居之口舌。南北長東西狹吉。東西長南北狹、初凶後吉。

『營造宅経』

凡宅東有流水、達江海吉。東有大路貧。北有大路凶。南有大路富貴。

凡樹木皆欲向宅吉。背宅凶。

凡宅地形卯酉不足、居之自如。子午不足、居之大凶。子丑不足、居之口舌。南北長東西狹吉。東西長南北狹初凶後吉。

敦煌「宅経」(P2615a) 『□□五姓陰陽等宅凶経』一卷)

卯酉不足、居之大富貴吉。子午不足、居之多口舌凶。

22 『陽宅十書』 凡宅居滋潤光澤、陽氣者吉。乾燥無潤澤者凶。

凡宅前低後高、世出英豪。前高後低、長幼昏迷。左下右昂、長子榮昌。陽宅則吉、陰宅不彊。右下左高、陰宅豐豪、陽宅非吉。

主必奔逃。

兩新夾故、死須不住。兩故夾新、光顯宗親。新故俱半、陳粟朽貫。

『營造宅経』 凡人居洪潤光澤、陽氣者吉。乾燥無潤澤者凶。

凡宅前低後高、世出英豪。前高後低、長幼昏迷。左下右昂、

男子榮昌。陽宅則吉、陰宅不強。右下左高、陰宅豐豪、陽宅

非吉。主必奔逃。

兩新夾故、死須不住。兩故夾新、光顯宗親。新故俱半、陳粟朽貫。

23 「屋」だけでは意味が通らない。後の文章に屋後という言葉があることから、おそらくは「屋」は「屋後」であろう。

24 拍脚山 山すそが拍子木のようにふたまたにわかれている山を

いうか。未詳。

25 探頭山 頂きが家を見張るような形をした山をいうか。未詳。

26 『陽宅十書』 凡造屋、切忌先築牆圍並外門。主難成。

『營造宅経』 凡造屋、切忌先築牆圍并外門。必難成。

27 『陽宅十書』

凡大門門扇及両畔牆壁、須要大小一般。左大主換妻。右大主孤寡。

『營造宅経』 門戸

凡門面兩畔壁、須大小一般。左大換妻。右大孤寡。

28 『陽宅十書』

大門拾柱、小門六柱、皆要著地則吉。門扇高於牆壁、多主哭泣。

『營造宅経』 門戸

如大門十柱、小門六柱、皆着地吉。門高於壁、法多哭泣。

29 『陽宅十書』

『營造宅経』 門戸 門口水坑家破。伶仃大樹當門、主招天瘟。

『陽宅十書』 牆頭衝門、常被人論。交路夾門、人口不存。

衆路相衝、家無老翁。門被水射、家散人啞。神社對門、常病時瘟。

門下水出、財物不聚。門著井水、家招邪鬼。

『營造宅経』 門戸

牆頭衝門、常被人論。交路夾門、人口不

- 存。衆路直衝、家無老翁。門被水射、家散人啞。神社對門、常病時瘟。門中水出、財散冤屈。門著井水、家招神鬼。
- 31 『陽宅十書』 糞屋對門、癰癩常存。
『營造宅經』 門戶 糞屋對門、癰癩常存。
- 32 『陽宅十書』 水路衝門、忤逆子孫。
『營造宅經』 門戶 水路衝門、忤逆子孫。
- 33 『陽宅十書』 倉口向門、家退遭瘟。搗石門居、宅出隸書。門前直屋、家無餘穀。
『營造宅經』 門戶 倉口向門、家退動瘟。搗石門居、屋出離書。門前直屋、家無餘穀。
- 34 『陽宅十書』 門前垂楊、非是吉祥。
『營造宅經』 門外垂楊、非吉祥。
- 35 『陽宅十書』 巽方開門、及隙穴開窗之類、並有災害。
『營造宅經』 所居向巽方開門、及隙穴開窗之類、立有災害無免者。
- 36 『陽宅十書』 東北開門、多招怪異。重重宅戶、三門莫相對、必主門戶退。
『營造宅經』 東北開門、多恠異之重重。宅戶三門莫相對。
- 37 香爐山 香爐の形をした山。
- 38 排符山 お符を並べたような形の山をいうか。未詳。
- 39 停屍山 屍をとどめたような形の山をいうか。未詳。